

*Helicobacter pylori* (以下, *H. pylori*) 陰性胃癌について、本号ほど豊富な内容で論じられた書物は世界中どこにも見当たらない。萎縮性胃炎と腸上皮化生が胃癌の原因であることは、これまでの数え切れないほど多くの研究で明らかであった。しかしながら、何が原因で萎縮が起り、腸上皮化生が発生するのは長い間不明であった。その後、Warren と Marshall により、*H. pylori* が胃粘膜より分離培養され、その菌が胃炎の原因であることが明らかになった。胃粘膜の炎症、萎縮、さらに腸上皮化生は *H. pylori* 感染陽性者に主に認められる現象で、胃癌の *H. pylori* 感染率が 95 % 以上と極めて高いことから、胃癌の原因は *H. pylori* 感染と考えられるようになった。さらに、胃炎の血清マーカーであるペプシノゲンと *H. pylori* 感染の有無の検査とを組み合わせた ABC 法が胃癌の高リスクを評価する方法として普及し、胃癌と *H. pylori* 感染との関係はますます密接なものとなっていった。一方、どう見ても胃炎や萎縮のない胃粘膜から発生する胃癌が少数ながらあり、複数の診断を行っても *H. pylori* 感染を証明できない胃癌症例や、ABC 法の A 群から発見される胃癌があることが指摘されるようになったが、極めて稀な現象との思いがあった。

今回の特集号は私と飯石浩康先生、八尾隆史先生の企画で進めたが、*H. pylori* 感染と胃癌との関連が極めて多くの研究で支持されている状況下において、まず陰性胃癌を主題とした特集号が成り立つのかという危惧から始まった。しかしながら、*H. pylori* 感染率が低下し、除菌療法が広く行

われ、さらに、ABC 法を用いた検診が普及する状況の中で、*H. pylori* 陰性胃癌について検討することが極めて大きな意義をもつことがわかり、この企画は必ず取り上げなければならない、完成しなければならないという使命に変わっていった。

さて、完成した号であるが、飯石浩康先生の序説に始まり、伊藤公訓先生には最も重要な *H. pylori* 陰性胃癌の定義、青木利佳先生には *H. pylori* 陰性胃癌が増加していること、藤崎順子先生には未分化型、蔵原晃一先生には分化型の *H. pylori* 陰性胃癌について論じていただいた。さらに、八尾隆史先生には胃底腺粘膜関連腫瘍と題して、胃底腺型胃癌と胃底腺ポリープの腫瘍化について述べていただいた。主題研究としては、ABC 評価の創始者である井上和彦先生の現時点の ABC 評価に対する見解と、土山寿志先生の *H. pylori* 陰性胃癌の画像強調内視鏡診断を取り上げた。さらに、主題症例として、各施設より臨床的意義の高い *H. pylori* 陰性胃癌の報告が続き、これほどたくさん *H. pylori* 陰性胃癌があるのかと、背筋が冷たくなる思いで各先生方の原稿を拝見した。

早期胃癌、微小胃癌の診断が広く、確実に行うことができるのは世界の中で日本だけである。*H. pylori* 陰性胃癌の発見に目を向け、病態の究明に取り組まなければならない時がついにやって来た。本特集号の読破なくして、その目的は達成されない。胃癌検診に従事している方々、上部消化管の内視鏡検査を行っている先生方、必読の書である。